

『ある朝の事件簿』

佐倉尚紀

我が家からゆつくり歩いて二十分もあれば着ける河川敷は、土手を降りた平坦な散歩にうってつけの場所であった。

街を縦断するように東西に流れるこの川は、三十数年前には二年も連続して大洪水を起こした。川とほぼ平行したメイン道路が“川”になりその川に材木や什器が流れ出し、道路に面した家々はそれは目を覆うような惨状で、住民をてんやわんやの混乱に落としめた。

しかしその後、河川拡張や河岸整備が行われ最上流のダムも効を奏し、増水はあっても氾濫は発生していない。

長期間に亘って河川敷が造成され、キヤッチボールが出来るくらいの広い芝地や、花壇・ベンチなどが置かれ、所々にはカラー舗装が施されている。

また歩道の脇にはゲートボール場やグランドゴルフ場などのスペースも確保されている。朝夕、健康ウォーキングする人、釣り糸を垂れる人、犬の散歩や休日の穏やかな日には家族連れの姿もここではありふれた光景である。

河川敷を含めた川幅は八十メートルはあると思われる。水流域の幅は二十メートル程であろうか。小魚が波紋をつくりカモの親子連れがのんびりと浮かんでいるのを見ることが出来る。水深は水の色具合で数十センチの箇所から一メートル以上の所もありそうだ。

川岸の歩道脇には四、五十センチメートル丈の雑草が生い繁っており、その危険ではないのだが、どこまでが岸なのか分かり難い。護岸壁は垂直に築かれた人の丈ほどの高さだった。

水辺に近づけるスロープ状の足場などは殆ど見当たらない。雑草は護岸壁の上部からやや傾斜をもたせた地面に生えていた。

私は愛犬さくらとの散歩で時折この河川敷にやってくる。

いつも同じ道ではつまらないので、その日の天候や時間帯それに気分次第で色んな経路をとっているのである。この河川敷にはビーグル犬、柴犬、マルチーズそしてさくらと同じラブラドルも見かける。皆それぞれ個性がある。お茶目なビーグル犬、気の強い柴犬、ちよつとすましたマルチーズそしてお人よしのラブ。どこの誰とも知らない飼い主同士であるが、逢う度に犬つながりでの他愛も無い会話が重ねられるのである。

その日私は午前五時頃この河川敷にやってきた。我々だけの空間がそこにあった。さくらのウンチも済んでおり、他に散歩している気配も見えないことを良いことに、首輪からリードを外した。

さくらは嬉しそうに私を一巡し、やおら周辺を駆け廻りだした。土手を駆け登り降りし河川敷を縦横無尽に走り

廻っている。その身体から開放感がみなぎっているのがはっきりと感じられた。時々立ち止まっては私の様子を探る。私が草陰に隠れ、少しでも姿が見えないと一目散にこちらに向かつてくる。もの凄い勢いである。なにもそんなにスピードをつけなくても良いものを。四本の足をフルに使ってブレーキをかけている。

「あまり遠くへ行くなよ」と私。

聞いているのかいないのか、盛んにあちこちと走り廻っていた。

そうこうしているうちに、あぁっと思っ間もなくドボンという音をたてて川に飛び込んでしまった。制動が利かなかったのか、それとも望んで飛び込んだのかは定かではない。というのも、元々水は恐れないどころか大好きだったからだ。

それにしても、今までも川にも海にも連れて行った。しかしその時は水辺に通じる道がついていたのである。そうした状態以外では飛び込むような仕草はかつて見られなかった。油断だっ

た。

アレアレと思いつながら川岸に近づいてみると、さくらは気持ちよさそうに流れに乗ったり、川上に向かったりして、目を細め遊んでいた。

数分の後、私の覗いている方にきて這い上がろうとした。そのとき、初めて自分の置かれている状況を察知したのだろうか。今までの楽しそうな表情が引きつってきたのが見てとれた。鼻声がか聞こえ出し、そのうちだんだんとその声が悲痛の声に変化してきた。泳ぎ方も違ってきたように見えた。護岸壁に手をかけてはあきらめ、離れては手をかけの繰り返し。その度に私に訴えるように目を向ける。

私は川下川上と、ほどよい浅瀬はないかと探した。さくらは私が遠ざかるたびパニックが強まっていくようだった。だが、そのあたりには歩き降りられるような岸辺は見つからなかった。私はさくらの近くに降り、リードを垂らしてみた。もちろん垂らしただけでは何の効果も無い。私も徐々に焦って

きた。水流も結構な勢いである。さくらが護岸壁に手をかけた時をねらって、何とかその手をつかめないかと腹ばいになった。しかし無理だった。私の手とさくらの手の間隔は五十センチはある。無理をすれば私が川に落ちてしまう。確か二百メートルほど下流に降りられる場所があったようだと思いついて、さくらは呼びながら下流に誘導しようとしたが、僅か十メートルほどでさくらは引き返す。何か使える物はないか辺りを見まわすがそんなものはない。こにも見当たらない。一人でも誰かがいてくれれば、私の足を掴んでもらい、精一杯川を覗き込めば何とかかなりそうだと思うのだが時間が早いせいかな誰も通りそうもない。

私は躊躇した。だが、こうするしかない。最終判断をした。そして、飛び降りた。川底がドロツとして足元にまとわりつく感触がなんとも気持ち悪い。予想したとおりであったのだ。

さくらが近づいてきた。手を伸べて抱えようとするも、お互い慌てている

ためタイミングが合わない。なんとか両手で抱きかかえ岸に上げようとするが、なにしろ三十キログラムに近い体重である。しかも足元がおぼつかない状態なのだ。とにかく普段以上に重く感じた。真横から抱いたり真後ろから抱いたりして岸に上げようとしても、重いのと岸が高いのとで難しい。護岸壁の上端に私の顔があるため、それ以上の高さに持ち上げないと駄目なのだ。さくらが静かに抱かれていればまだしも、手足バタバタ身体くねくねの状態では、持ち上げ投げ上げてもまた落ちてくる。その繰り返し過程で、背中の上から手を回しては無理だと分かり、のど側とお腹の下から手を入れ私の頭と肩を台座にして思い切り放り上げた。後ろ足が岸から落ちそうになってバタバタしているのを素早く尻を前方に押し込んだ。

こうしてようやく水面のさくらとの格闘が終わった。さくらは雑草の土や埃と泥水とで薄汚れた野良犬の様相で

ある。私の上半身も泥まみれになった。しかし一息つけた。やれやれと思った。

今度は私の番である。足元の土色の水もまた元の色に戻っていた。

さてと岸に上がるうとして足場を探すがこりや困った。足を引っ掛ける部位や手を掛ける所が見当たらないのである。凹凸でもあれば何とかなるのだがそれも無い。飛び上がるには壁が高すぎる。それに、蹴る足元も柔らかく少しめり込んでいる。水の流れも手伝って難易度は高い。さくらの状況は雑草もあり私にはよく見えない。それでも、河川敷を走り回っては雑草の中から私の顔を覗いている。河川敷と私の間を行ったり来たりしていた。

さくらの姿が見えなくなったとき、突然人の声があった。

「コラー！こっちへ来るな！あっちへ行け！」

「この野郎！なんだこの犬は！」

「シッ！」

どうも散歩の人が通りかかったらし

い。その人にジャレようとしているようだ。人なつっこい性格ではあるが、他人から見れば大型犬であり怖く感じるだろう。しかも汚れ犬でずぶ濡れだ。そんなのに纏わりつかれたら衣服も汚れてしまう。もしかしたら野良犬や捨て犬か、と勘違いされても仕方ない状態である。怒鳴られ怒られては私の居る所にきて顔を覗き込んでいる。そして又駆けて行く。

「こっちへ来るな！」

同じ言葉が聞こえる。ジャレつこうとしている光景が浮かんだ。こんな犬にじゃれつかれたら大変だろうなと思つたが為すすべがない。

「すいませーん」

「どーもすいませーん」

繰り返し私は水面から大きな声で謝った。向こうもなんだ飼い主がいるじゃないか。居るんだったら何故対処しないのかと思つたらしい。

「飼い主のマナーがなってない！」

罵声が聞こえてきた。その通りであった。

何とかしたい気持ちには十二分にあった。しかし私はそれ以上に岸に這い上がることに、よじ登ることで精一杯なのだ。「すいませんが少し手伝ってくださいませんか！」

よほど声をかけようとも思ったが照れくさいのでやめにした。姿の見えない飼い主の声だけが聞こえるのだから、その人には一体何をしているのかと興味悪く感じただろう。汚い犬が飛びつこうとしているのに飼い主は姿さえ見せない、とんでもないやつだと考えていたかも知れない。ましてこの時間、人間が川の中でもがいているなどは考えられないことだ。

散歩人の声が右から左へ徐々に移動し遠のいていく様子が感じられた。さーてとどうしたものか。下流の浅瀬にいく二百メートル程の間には深い部分もあり歩いていくことは難しい。川岸の向こう側へ渡ることも難しい状況であった。このまま上がれなかったらどうなるのかな不安がよぎった。家には六時半位までに戻らないと出勤す

るに慌しくなってしまう。

私の目の前にさくらの尻尾が垂れ下がっていた。四本の足で踏ん張りながら尻尾を私の頭の方へ。そうか自分の尻尾に掴まれということか。私はその尻尾に手を伸ばした・・・なんていうのはおとぎ話の世界。「くもの糸」でもあるまいし、こんなことが現実にあるわけがない。

さくらは私の所へ来てはまた河川敷のどこかを跳ねまわっているようだった。手がかりになるものは何でも使えど、雑草を両手で握り這い上がるようにするがすぐにプツンと切れてしまった。時間は気になるし、そのうち誰も通らなくなってしまうらどうしよう、家人に私がこの場所に居ることがスグ分かるだろうか、翌朝の新聞に「溺死体か・・・」などとよくありそうな事件として載ってしまうのかなど思い巡らしてしまった。

雑草を掴んでは切れズリ落ち、掴んでは切れズリ落ちと何度も失敗を繰り返

返した。私は場所を左に少しずつ移動した。雑草の中に少し筋の通ったような、生えてからある程度日にちの経った強そうな草群が目についた。その草を掴めるだけ掴み両脇をできるだけ締めハズミをつけてよじ登った。下っ腹が護岸壁の上端まで上がった。私はさらに目の前にある雑草の丈夫そうな根っこにしがみついて身体をこするよう動かした。ようやく、護岸壁上端を蹴み石に使うことが出来るようになった。上がった、上がった。思わずフーと息を吐いた。

河川敷の離れた方向に先ほどの散歩人が、まだ私から見える大きさで白い背中を見せてゆっくりと歩いていった。二人連れの夫婦のようであった。私はその背中に「申し訳ありませんでした」と謝った。内心「少しは気づいてくれたって。こっちの身にもなってくれ」の気持ちもあつたのだが。

さくら以上に汚れたズボンとシャツ

で私はとぼとぼと歩き出した。

さくらかも心なしか疲れたような汚れ顔だった。

イエローラブがグレーに見えた。

変ちくりんな姿で散歩から戻った私に、妻は何やってんのかという顔つきだった。

一部始終話した。

「どうもな、さくらかは俺が川の中に居たのを助けようと散歩の人に教えていたんじゃないかな。こっちに主人が居るので助けて！ と、その人の足元にすがりついては俺の居場所を行ったり来たりしてたんだよ」

「そんなことは、無い。ほら時間がないよ」の妻のひと声で、今日の散歩が終わった。

他人には些細なことでも本人にとっては重大な事件もあるものだ。

今でも、あの時さくらかはきつと・・・・・・・・・・と思っている。

完